

論文の内容の要旨

論文題目	Philosophical Basis of Aristotle's Theory of Moral Education in the <i>Nicomachean Ethics</i> (『ニコマコス倫理学』におけるアリストテレス道德教育論の哲学的基礎)
氏名	Koji Tachibana (立花幸司)

本論文の目的は、アリストテレス (Ar.) の『ニコマコス倫理学』(NE) を、彼の道德教育論に哲学的な基礎を与えている著作として解釈することである。

この目的を達成するため、本論文は以下の構成となっている——イントロダクション、第一部 (第一章～第三章)、第二部 (第四章～第七章)、結論、補遺 (I～III)。

まず、イントロダクションでは、この論文の研究史上の位置づけ、研究遂行上の問題点、この論文がとる方法論、の三つを論じている。多くの古代教育史家たちは、「paideia (教育・教養)」の歴史的叙述をホメロスから始まり古代ローマの教育へと受け継がれていく流れとして与えるなかで、特筆に値する人物として古典期アテナイで活躍したプラトンとイソクラテスをとりあげる。両者は、徳の本質について、それゆえまた教育の本質について、各々議論を展開し激しく論争する。両者の哲学観・教育観はヘレニズム期そして古代ローマへと受け継がれ、ヨーロッパの教育文化の二つの伝統 (哲学と修辞学) を形成することとなる。

こうした古代教育史の叙述において、プラトンやイソクラテスと同時代に生き、また後代の影響力という点で両者に伍しているにも関わらず、Ar.の教育論が取り上げられることはあまりなく、同じことが哲学研究の分野にも当てはまる (補遺 I も参照)。その背景として、関連領域の先行研究の蓄積の少なさや、プラトンやイソクラテスと比べた際に

Ar.自身が教育についてあまり論じていないというテキストに内在的な問題などといった研究遂行上の困難を指摘することができる（補遺Ⅱも参照）。そして現代の研究者らのアプローチを吟味することを通じて、テキスト解釈に基づいた彼の道德教育論およびその哲学的基礎の再構成をこの論文の方法論として採用した。以上により、イントロダクションの三つの課題が言及された。

第一部「アリストテレス道德教育論の倫理的・政治学的アウトライン」では、第二部で解釈の焦点となる Ar.の倫理学の主要トピックを、政治学のトピックとあわせて教育の目的（第一章）、方法（第二章）、担い手（第三章）の三つの観点からまとめることにより、彼の道德教育論の素描を与え、これらトピックが道德教育論の内部で位置づけられている仕方を示している。

まず、第一章「教育の目的」では、教育の目的としての幸福、幸福の規定を与えている徳に即した魂の活動、徳を構成している性格の徳と思考の徳の特徴などをまとめている。ついで、第二章「教育の方法」では、教育の条件としての人間が有しているべき自然的条件、教育の最初のステップとしての習慣づけ、習慣づけに密接に関わる行為と感情、そして更なる教育のステップとしてのロゴス的教育についてまとめている。さいごに、第三章「教育の担い手」では、個人、市民、ポリスの三者関係、理想的ポリスにおける各々の幸福の合致、教育の担い手としての市民と法についてまとめている。これらの作業を通じて、第一部では、Ar.道德教育論の素描として、（1）Ar.の道德教育論がテキスト的にまとまったかたちでは論じられておらずテキストの様々な個所に散見されること、しかし（2）緩やかながらも全体として或る体系を成していること、そして（3）主要トピックがその全体像のうちにそれぞれの仕方で位置づけられていることという三点が示されている。

第二部「アリストテレス道德教育論の哲学的基礎」はこの論文の本論にあたる。ここでは、イントロダクションで提示された方法論に従い、また、第一部で確認された素描を背景とし、NEの主要トピックの解釈を通じて、彼の道德教育論の哲学的基礎を多角的に明らかにする。

第四章「アクラシアと教育」では、「意志の弱い人は道德教育の対象である」というテーゼの背景にある道德教育の範囲についての Ar.の考え方を、七巻三章におけるアクラシアの分析手法の解釈を通じて、再構成している。焦点となるのは、無知から回復する仕方については意志の弱い人と酔っぱらいは共通なので「自然学者たちに訊かねばならない」点があるという Ar.の主張の解釈である。検討の結果、意志の弱い人の改善に携わる道德教育は医学的治療とは幾つかの点で異なりながらも、お互いが影響関係にあり、探求の進展に応じて道德教育の範囲は再確定されると Ar.は考えていることを明らかにした（補遺

IIIも参照)。この一連の分析を通じて、アクラシアをその一類型とする行為概念の分析にどのような教育論の哲学的基礎が見いだしうるのかが問題として浮上し、第五章に引き継がれる。

第五章「行為と教育」の狙いは、Ar.が行為概念の分析として与えている基準（自発性・非自発性・反自発性）は教育論の哲学的基礎となりうるか否かを検討することである。焦点は、「個別的事実の無知はその行為を反自発的とするか否か」という解釈上の問題を解消することである。これまで、法的責任論や道徳的責任論などの解釈が主流であったが、これに対してこの論文では、Ar.の行為分析の基準は、教育の対象となる行為を弁別し、徳ある人の育成に寄与することを念頭に置いたものである、という教育論的解釈を提示している。これにより、行為分析がなぜ、どのような仕方でも徳教育論の基礎となりうるのかを再構成した。この一連の分析を通じて、教育の対象とならない反自発的な行為（不運な出来事）は教育の対象となるか否かが問題として浮上し、第六章に引き継がれる。

第六章「運と教育」の狙いは、教育が人を幸福にするという Ar.の主張の背景を、教育は不運に晒されている人をも幸福にする力があるかという観点から検討することである。Ar.は、教育が育む「徳に即した魂の活動が幸福の実現にとって決定的である」という公式見解を示しながらも、運不運は人の幸福に影響を与え台無しにしてしまうこともあると述べる。そこで問題となるのが徳に即した活動と幸福の結びつきの強さであり、「決定的」の実質である。これまで、多くの研究者が、運不運が作用する範囲を制限したり幸福概念を二層にわけたりして二つの主張を整合させようとしてきた。これに対して、この章では『自然学』二巻における運の議論を併せて検討することで、教育は運そのものには無力でありながらも、運による出来事を回避すべく自体的因果系列を把握させるよう人を教育することは可能であり、結果として、それを把握し行為する徳ある人を育むことで、徳ある人は運に晒されながらもそれに抵抗できる力をもつことができると解釈することで整合性を保てることを示した。これにより、運不運が幸福に影響を与えながらも、徳に即した魂の活動が「決定的」であるということの意味を確保した解釈を提示している。この一連の分析を通じて、深刻な不運は徳ある人であっても対処できず、結果として教育は無力ではないかという問題が提起される。これは、他者がどのような役割を果たしうるのかが問題として第七章へと引き継がれる。

第七章「友愛と教育」の狙いは、友愛は幸福に必須であるという Ar.の主張の背景を他者の教育的役割という観点から検討することである。これまでの研究の多くは、彼の友愛論を友愛の定義の問題として、また利己主義・利他主義の問題として論じることが多かった。これに対して、この章が焦点としたのは、「二人で行けば」一層よく行為し考えるこ

とが出来ようになる、という Ar.の主張の解釈である。検討の結果、「優越性に基づく友愛」も「完全な友愛」も教育的関係でありうると解釈できることを示した。これを通じ、Ar.の友愛論は、友愛（関係にある他者）は独力では到達できない徳ある段階に人が到達することを可能にするという点で教育的である、という思想を含み込んだものであり、人は他者によって、あるいは他者と共に、徳ある人となること、それゆえ幸福に＜なる＞ためにも友愛が必須である、という友愛論の教育論的背景を明らかにした。

結論では、本論文の内容をまとめ、徳倫理学への含意と今後の課題について述べている。本論文は、Ar.の道德教育論の哲学的基礎が、NEの主要トピックについての彼の論じ方のうちにそれぞれの仕方で見いだせることを示した。NEの各トピックは、Ar.にとって、各々の主題を論じたものであると同時に、Ar.の道德教育論を哲学的に支える礎石ともなっているのである。これにより、本論文の目的——NEという著作を彼の道德教育論に哲学的な基礎を与えている著作として解釈すること——が達成された。このことは、徳倫理学に対してある示唆を与える。それは、徳倫理学が一つの倫理的理論であるためには、幸福・徳・その構成要素を分析し定義を与える理論と、人が善くなる時にそれらに関わる仕方についての理論とが統合されている必要があるというものである。Ar.のNEはそれを実践してみせた著作といえる。

Ar.の道德教育論およびその哲学的基礎の研究を拡充するための課題は残されている。一つは、政治学における教育論の哲学的分析である。もう一つは、実践哲学以外に注目した研究である（形而上学、魂論、知識論など）。これらを俟ってはじめてAr.道德教育論およびその哲学的基礎の全体が明らかになるが、これらは今後の課題である。

この論文には三つの補遺が添付されている。補遺Ⅰでは、1950年代をさかいにAr.教育論が復権していった歴史的経緯の一端を、20世紀の英国および日本でプラトン哲学・政治学・教育学がおかれた政治的状況（に関する諸研究）を瞥見することで指摘している。補遺Ⅱでは、Ar.道德教育論研究の困難さの一つの要因として、Ar.自身が教育関連語を使用する頻度がプラトンやイソクラテスと比べると低いという点を、統計的に調査し明らかにしている。補遺Ⅲでは、Ar.の倫理学には様々な点で医学とのアナロジーが見いだされることを下敷きに、Ar.における倫理学と医学の密接な関係を指摘している。